

## 村口氏が注目するこれからの技術・ビジネス分野

## ■ライフサイエンス分野

- バイオ・インフォマティクスを応用したタンパク質解析
- 各個体の遺伝子解析によるテーラーメイド医療
- バイオ技術による新薬

## ■環境分野

- 燃料電池など代替エネルギー

## ■インターネット・テクノロジー分野

- ブロードバンド常時接続によるネット人口の底

## ■辺の拡大

- Peer to Peerサービスによる新ビジネス
- XMLとデータベースの結合
- キャリアを問わない携帯電話コンテンツの表示

## ■素材・デバイス分野

- 超精密・超薄型実装技術
- 特殊半導体技術
- ナノテクノロジーなど

ベンチャーキャピタリストが注目する、  
新ビジネス創造の  
プロセスにヒントがある

日本テクノロジーベンチャーパートナーズ投資事業組合（NTVP）のゼネラルパートナー・村口和孝氏が注目する、これからの技術やビジネス分野は右ページ上記のとおり。既に何度も指摘されている分野ではあるが、村口氏の分析の視点はほかのキャピタリストとはやや異なる点もある。簡単に説明しよう。

ライフサイエンスとはいうまでもなくポストゲノム時代に、タンパク質機能解析やテーラーメイド医療、バイオ創薬へと進む流れである。バイオ・インフォマティクスなどに見られるように、今後のライフサイエンス分野では、基礎研究、計測系、情報系が融合した技術開発が重要になる。

ブロードバンドはインターネットとの広帯域常時接続だが、村口氏は、

「広帯域で動画を見るというのはまだまだ大きなインパクトにはならない。むしろ、日本中の家庭が常時接続になることが、大きな転換点になるはずだ。これまでインターネットにつながなかった家庭の主婦などが、日中常時つながりっぱなしにすることで、これまでのインターネットビジネスの概念も変わってくる」

という。昨年のITバブルの崩壊は、インターネット技術そのものの成長力や可能性を奪ったわけではない。むしろ「スタンドアロンなポータルサイトに人を集めて、実際はどこへ行っても同じようなコンテンツで高売できるといった『牧歌的な』インターネットビジネスが終わったにすぎない」と村口氏。

いわば、インターネット時代初期の「エンクロージャー」（囲い込み）は終わり、インターネットは技術的にもビジネス的にも、よりオープンな環境に移行する。時代はこれからが本番なのだ。「サーバーを介さずお互いのコンテンツが自在に交換されるPeer to Peerやその発展型、あるいはお互いのデータベースを利用しながらコラボレーションしていくXML技術などが、むしろこれからは本

命になる」という期待があるという。

例えば、オークションサイトも単独ではもはやビジネスができなくなる。むしろ、無数に広がるオークションサイトの情報をバックグラウンドでつなぎ、そこでの情報を交換する「エクステンジ・モデル」と呼ばれるものに注目する。

「インフラとコンテンツだけでなく、これからはその間にある情報交換などの仕組みをつくるプラットフォームの技術が重要になる」と村口氏は指摘し、実際にもXMLソフト開発で先行するインフォテリアや、ネットオークションのディー・エヌ・エーなどに投資をしている。

と村口氏は指摘し、実際にもXMLソフト開発で先行するインフォテリアや、ネットオークションのディー・エヌ・エーなどに投資をしている。

## ハイテク職人型企業の技術こそ日本の強み

村口氏が関心を寄せるのはネットワーク・ベンチャーだけではなく、日本がこれまで得意としてきた素材・デバイス技術である。

青色発光ダイオードの日亜化学工業を生んだ四国には、ほかにも研究開発型ベンチャーがある。徳島大学での研究テーマを起業化し、窒化ガリウム利用の紫色LEDの開発を始めたナイトライド・セミコンダクターはその一つ。ほかにも、メモリスティックの中に8層ものチップ積層を可能とする超精密・薄型の実装技術を持つノース（東京・豊島区）など、いわばハイテク職人型の企業にも投資を惜しまない。

「外国に技術の範を求めても限界がある。日本の在来型技術を発展させたベンチャーにもいいものがある。足元の技術を掘り起こすことも大切です」

NTVPの投資基準の一つは、「未来に対し

て科学的にまじめであること」。まじめというのは保守的であることとは違う。きちんと商道德を守ると同時に、過去のパラダイムにとらわれずに、未来を志向する誠実さを意味する。それは、優れたエンジニアが本質的に持っている美質であったはずだ。

「ベンチャーは赤字だからよくないという考えがあるが、これはおかしい。未来への投資というのは最初はいつも赤字になるのが当たり前。赤字も出せないベンチャーはだめなんです。研究開発が赤字だからといって先行投資をやめてしまう企業もあるが、それではブレイクスルーは起こらない」

過去の経験にしがみつき、不況に首をすく



日本テクノロジーベンチャーパートナーズ投資事業組合 ゼネラルパートナー  
村口和孝氏

むらぐち かずたか ●1984年、慶応義塾大学経済学部卒業、在学中よりベンチャーキャピタリストを志し、野村証券系VCジャフコに入社。98年ジャフコから独立、日本初の投資事業有限責任組合を設立し、独立系ベンチャーキャピタリストとして活動。

めて、チャレンジをやめてしまうのか、それとも、未来へまじめに突き進むのか。それは日本企業の研究開発体制、ひいてはそこで働く一人ひとりのエンジニアに問いかけられた本質的な問いである。村口氏は最後に、ここ数年で顕著になった世の中の潮流の変化を、右のような8項目にまとめて紹介してくれた。新興株式市場が誕生し、VCなど銀行にかわる資本出資の回路が整備されてきたりと、新興企業育成のインフラ整備は確かに4～5年前には想像できなかったこと。従って、最近のVCも、株式会社予備軍を探すファインディングの時代から、起業家と一緒にリスクを背負って会社をつくらだす「事業開発型」へと転換しているという。

成長点に自ら身を置くことの醍醐味と切実さ、VCとベンチャー起業家は共有しつつある。本当はエンジニアともそれを一緒に分かち合いたいと、村口氏はいうのだが……。

### ここ3年間に起こった強いベンチャーが育つための8つの変化

- ①産業構造（グローバル資本市場の出現）
- ②ロールモデルの出現（同世代から成功者が出てきた）
- ③ベンチャーに対する資本インフラが整備された
- ④大学の教育が変わった（事業計画、ビジネスモデルなどが経済学部でも教えられるようになった）
- ⑤新市場（ナスダック・ジャパン、東証マザーズ）の設立
- ⑥TLO（技術移転機関）の設立
- ⑦独立系のVCが増えてきた
- ⑧資本の社会的循環モデルが整備されつつある（VCから恩恵を受けた人が篤志家となり、次サイクルに還元）